

地域と歩む麻機遊水地 保全活用プロジェクト「麻活」

静岡県立静岡北特別支援学校

はじめに

静岡県立静岡北特別支援学校（以下、本校という）のある静岡市は、北に南アルプス、南に駿河湾、東側には富士山を臨む、豊かな自然に恵まれた温暖な土地である。市内の日本平や三保海岸からは、富士山と駿河湾を一望でき、「三保の松原」は世界文化遺産「富士山」の構成資産の一つとして指定されている。

本校は、静岡駅の北方約5.5kmに位置しており、市内の知的障害のある児童生徒の通う特別支援学校である。小学部・中学部・高等部の全校児童生徒及び教職員合わせて500名を超える県内でも規模の大きな学校であり、地域の特色を生かした本校ならではの教育課程づくりに、日々、取り組んでいる。

本校と麻機遊水地

本校は、日本重要湿地（ウェットランド）500に指定されている麻機湿原のほぼ中央に位置している。麻機地区は竜爪山、賤機山、巴川、浅畑川に囲まれた低湿地帯であり、かつて存在した多くの沼が水田への土地利用等により徐々に姿を消していった経緯がある。この巴川流域は急速な市街化とともに平地部であることから、幾度となく浸水被害に見舞われてきた。特に、本校設置年である1974年7月7日の集中豪雨「七夕豪雨」では、約26000棟の家屋浸水という甚大な被害を記



集中豪雨「七夕豪雨」（巴川流域七夕豪雨二十年誌より）

録した。これを契機に巴川が「総合治水対策特定河川」に指定されたことで、第1工区から第5工区までの麻機遊水地（以下、遊水地という）の整備が進められ、地域防災上、重要な役割を有している。

近年では、2014年10月6日に上陸した台風18号により、市内に約1200棟の浸水被害があった。その折に、生徒たちは水が貯められた遊水地を見聞きすることでその治水機能を実感し、自然災害から地域を守ることへの強い関心を高める機会となった。

遊水地は、近年の整備が進められる中で堀削された池沼の土中に眠っていた植物が復活したり、多くの野鳥が飛来したりし、動植物にとっても貴重な生息の場となっている。他にも、大規模なミズアオイの自生地でもあり、タコノアシやオオアブノメなどの絶滅危惧種も多数発見されている。しかしながら、このような自然再生が図られる一方で、周辺地域の土地開発や里山の荒廃、放置竹林の増加、ごみの投棄などの深刻な課題を抱えていることも確かである。遊水地が豊かな自然環境を保つことで地域の憩いの場となり、災害時には治水機能を発揮することで防災上の役割を果たすことができるためにも、里山も含めたさらなる整備の充実が喫緊の課題である。

さらに本校は、この遊水地の自然環境を保全、再生、維持管理するために地域住民やNPO、専門家、企業、関係団体等によって構成されている「麻機遊水地保全活用推進協議会（旧、巴川流域麻機遊水地自然再生協議会）」（以下、協議会という）に加盟している。ゆえ



遊水地の風景（生徒撮影写真）

に、本校が地域の環境問題に関心を寄せ、地域における役割を果たしながら、地域と協働して自然再生、環境保全活動に取り組んでいく必要があると考える。

「麻活」の立ち上げに向けて

2014年の「障害者の権利に関する条約」の締結を受け、障害に基づくあらゆる差別や合理的配慮の否定を禁止し、障害者が社会に参加し包容されることを促進することとなった。ゆえに、今まで以上に障害の有無に関わらずに理解し合うことが不可欠であり、教育においても地域と協働した取組の重要性が高まっている。

こうした社会的背景のもと、本校と地域とが多様な教育活動を協働して展開しながら、地域の環境問題に取り組むことを目指し、「麻機で生活する私たちの、私たちによる、私たちのための活動『麻活プロジェクト』」（以下、「麻活」という）を立ち上げた。この「麻活」を推進することは、静岡県の教育の基本目標である「有徳の人の育成」に資する活動でもある。有徳の人とは「自らの資質・能力を伸長し、個人として自立した人」「多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にすること」「社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人」の三点で示されている。すなわち、いつでもどこでも学び続けながら互いの存在を認め、進んで社会づくりに行動する人のことである。つまり「麻活」により、本校の生徒と地域の方とが相互に理解を深めながら交流の幅を広げるとともに、地域づくりに主体的に参画することができると思う。

取組の経過と発展

「麻活」は、2013年度に構想を検討し、2014年度から高等部での取組を開始し、徐々に全校へ移行していくことにした。遊水地に関わる「ひと・もの・こと」の全てを題材とし、生徒も教師も自然再生や環境保全、治水・防災等の切り口から教育活動全般の中で総合的な取組を展開させることに特色を持っている。

(1) 地域の中で学ぶ

まず、総合的な学習の時間における取組である。生徒たちは、遊水地の整備された歴史的経緯や治水・防災に関する学習、絶滅危惧種を含む動植物の生態などの調べ学習を行い、その学習効果を掲示物にまとめたり発表し合ったりする活動が各学年で年間を通じて定着している。このような調べ学習を通じて得られた知識が深まるにつれ、生徒たちは「遊水地のために自分

たちにできることは何か」という思いを抱き、具体的な行動へと関心が高められていった。

例えば、遊水地の自然環境を守るためのクリーン作戦の実施や看板の設置、遊水地の魅力を紹介するかるたやキャラクターの作成、遊水地の蓮を校内で育てて再び遊水地に植え替える取組、幻のカヤネズミの夜間撮影への挑戦などにつながった。他にも、遊水地の湿地部の泥を採取して、長い間、土中に眠る種子を再生させることで過去の植物の生態を調べるシードバンク調査も行っている。校内に置かれたコンテナの中にはミズアオイやタコノアシ、オオアブノメ等の絶滅危惧種が育てられ、少しずつ遊水地へと返すことができています。この調査は毎年、上級生から下級生へと受け継がれており、絶滅危惧種等の希少植物の再生活動の一助となるものである。

また、総合的な学習の時間の他、学級活動等においても遊水地内に設けた8地点を月に一度パトロールをし、雑草やごみ等の周辺観察と定点からの撮影を行っている。生徒が撮影した写真は、隣接する静岡県立中央特別支援学校に届けられ、協議会のホームページにアップロードしていくといった取組にも発展した。さらに、遊水地に咲く蓮などの自然を描いた作品を美術で制作したり、校内写真コンクールを生徒会が年2回開催したりし、その作品を地域施設やイベント等で展示



シードバンク調査「土の中の宝物探し」



遊水地の蓮を描いた生徒の美術作品

する機会が増え、遊水地の自然と生徒の豊かな感性に多くの方が触れていただくこともできている。

以上のような年間を通じた様々な取組は、地域の専門家や各種団体、大学の研究者などが生徒とともにフィールドワークを行ったり、生徒の質問に手紙やメールで回答していただいたりしながら進め、遊水地や自然環境についての生徒の理解を深めている。高等部3年間を通じて遊水地について学び、遊水地のためにできることを仲間とともに積極的に進めていくことで、生徒にとって遊水地は身近で大切な存在となっていくのである。

(2) 地域とともに働く

知的障害を対象とした特別支援学校には、職業生活の自立を目指して実際の・体験的に学ぶ作業学習という指導の形態がある。この作業学習では、高等部の全部で10の作業班が連携しながら地域との協働という視点を持って、地域の特色を生かした作業活動の充実を図っている。

例えば、遊水地の遊歩道の除草作業やヨシの刈り取り作業を年間平均50回ほど実施したり、400名以上の市民や企業等が参加する年に一度の「麻機遊水地クリーン作戦」にも参画したりしている。この除草作業は、遊歩道を歩きやすく美しく保つためだけのものではなく、周囲の植物を刈り取ることによって在来種の生育場所を守る効果もある。実際に本校が担当している除草作業区画の一つでは、サクラタデの群生の広がりが見られ、年々確認され、作業の効果が現れている。他にも、除草作業を行うことで遊水地の周囲堤の斜面の状態を定期的に確認したり、投棄されるごみの減少にもつながったりしている。

また、除草作業で刈り取ったヨシを加工し、「ヨシの壁飾り」「ヨシの写真立て」などの作業製品を製作することができた。他にも、ヨシを粉碎し、ヨシ紙を開発することもでき、「ヨシのランプシェード」「ヨシ紙のポスト

カード」「ヨシ紙のポチ袋」「ヨシ紙の名刺」などが製品化され、地域の方に使っていただくこともできている。

遊水地の資源を生かした作業製品はヨシの活用だけではなく、遊水地の蓮をモチーフにしたポーチやカヤネズミをモチーフにしたマグネットなど、多様な製品が年々開発されてきている。他にも、遊水地の水源となる里山の放置竹林の竹材を地域業者に納入いただき、それらを加工して、年間300本以上の竹灯籠を製作している。この竹灯籠は、地域イベントの場で展示や点灯をしたり、購入いただいた家庭を彩るものとして使ってもらったりしている。さらに、粉碎した竹粉や竹炭、ヨシのチップを活用して残菜を堆肥へと作り替える取組も行っている。里山の竹、遊水地のヨシ、そして、残菜が良質な堆肥へと生まれ変わり、農地の土壌改良、循環型農業にも挑戦することができている。こうした竹材の利活用も、微力ではあるが里山の水源涵養機能を保全する価値を有していると考えている。合わせて、遊水地内の農地の開墾や遊休農地の活用を行いながら麻機地区固有の「麻機蓮根」の他、さつまいもやそばなどの栽培を行ったり、遊歩道の花壇を囲むコンクリートパネルの製作や花壇の水遣りを通じた管理を行ったりもしている。

こうした作業活動による自然再生や環境保全活動



ヨシ紙を使った作業製品



遊歩道（周囲堤）の草刈り



地域の方からの技術指導（竹灯籠製作）

は、各作業班が年間を通じて行っており、多数の関係団体から作業依頼を受けたり、企業の方に生徒とともに働きながら技術指導を行っていただいたりしている。

生徒たちは「麻活」を通じ、遊水地の豊かな自然や地域の方々と触れ合うたびに「麻機に通う自分たちだからできること」を模索し、地域のために進んで行動する姿へと成長を遂げている。生徒の「遊水地は地域の宝物」「遊水地は僕たちが守る」という強い思いは除草作業等の整備活動だけでなく、地域へ呼び掛ける広報活動や資源の利活用の活動となって受け継がれている。そして、生徒たちが「麻活」で学んだ知識や技能は学校生活だけでなく、家庭生活や居住地域での生活においても自然や物を大切にする姿、水害や防災対策に関心を寄せる姿へと学びの広がりを見せている。

地域とのつながり

「麻活」の取組を通じて得られる様々な効果や価値については、地域の方々からも折に触れ生徒に伝えられ、より一層の取組への励みとなっている。また、取組の様子は地域イベントでのパネル展示や、本校と関係団体等のホームページへの掲載の他、新聞報道などがされ、地域に向けても遊水地や里山の豊かな自然環境だけでなく、治水・防災への理解啓発にも役立てることができた。学校と地域、生徒と地域の方々とは相互に理解を深めながら活動することと並行して、関係団体においても多くの事業が展開され、地域全体の活性化にもつながっている。

「麻活」は、地域の多くの方々の協力により進められてきたが、当初は特別支援学校と協働して行うことについて「障害のある生徒にどのような活動ができるのか」「地域が学校にどのように関われるのか」などの強い不安感が投げ掛けられることがあった。それは教師側も同様であり、自然環境についての専門的な知識が必要であったり、地域と連携して進めるための方法が分からなかったりするなどの不安があった。そこで協議会メンバーを中心に、教材や場の提供、取組への助言をいただき、地域の方々と教師、ときには生徒自身が打ち合わせを行い、顔の見える関係づくりに努めた。校内においても、2015年度の学校経営の柱の一つに「地域と連携・協働した指導の推進」を掲げ、小・中・高の各学部プロジェクト担当者を位置付けるといった組織的整備を行った。

2016年度には、それまでに協力いただいた地域の

方々にアンケート調査を実施したところ、「障害児者に対する理解において大きな意識変容があったこと」「生徒と関わりながら教育活動に参画することが社会貢献の形と気付いたこと」「障害の有無・軽重に拘らずに人として認め合い支え合うことの価値を実感したこと」などの「麻活」の効果を立証する回答も得られている。そして、今後も生徒が遊水地の魅力や自然環境、治水・防災について積極的に発信していくことや、地域との交流の充実による生徒の社会自立への期待も寄せていただいている。

おわりに

「麻活」は2014年度の高等部での取組を契機に、学校経営の柱、学校生活の合言葉として定着し、小・中学部の児童生徒も遊水地を散策したり、草花を使った作品づくりをしたりするなどの取組が日常的に展開されている。これまでの自然再生や環境保全、治水・防災に関して積み重ねられた取組を上級生から下級生へと受け継ぎ、一層の効果と広がりをもたらすよう充実させる基盤ができたと考える。また、「麻活」を通じて地域の方々が本校に気軽に寄ってくださるようになり、本校の応援団が増え、地域との強いつながりを得ることもできた。こうしたことを本校の共有財産とし、地域の特色を生かした本校らしい教育活動の充実と定着に取り組みながら、遊水地と里山の自然環境を守り、地域づくりに積極的に参画する児童生徒の育成に努めていくようにする。

最後に、「麻活」の立ち上げから4年目を迎えた。これまでに協議会メンバーを始め、地域の方々に温かな御支援をいただいたことに、深謝の意を表したい。



静岡北特別支援学校 麻活キャラクター
(生徒デザイン考案)

静岡県立静岡北特別支援学校